十七歳の青春の記録

廣瀬利夫（南本町・62歳）

昭和二十年三月十日の東京大空襲は、私にとって、生涯忘れ得ない出来事でした。

当時私は、墨田区吾嬬町の小さな町工場で旋盤見習工として働いていた。京成荒川駅から上流に向って、五百米位歩いた荒川の土手の下に工場はあった。

従業員は二十五名位だったと思う。その頃町工場は何処も航空機や船舶の部品を製造する、軍の下請工場だった。

しかし、限られた電力のために、電気は大工場優先だった。私達の町工場では、その頃は週に二日の電休日となり、B29の空襲の度に仕事の手を止めて、防空壕に退避しなければならなかった。生産の低下は、見習工の私でさえ、こんなことでいいのかしらと思う毎日だった。

昭和二十年に入って、間もない冬の寒い日だった。雲は低く垂れこめて、今にも降りそうな雲行きだった。

警戒警報の直後だった。あの無気味なB29の爆音が、すでに上空から微かに耳に入っていた。これはおかしいぞと思っている矢先に、先輩の工員から、もう上にきてるぞ、廣瀬、土手に上がって見てこい、と命令です。

私は急いで土手に上がり、上空を見上げたものの、低く垂れこめた密雲が重々しく見えるだけだった。その雲の上からB29の腹に響く爆音だけがきこえる。

その時、異様な音が上空から迫ってきた。爆弾だ、私は咄嗟に判断して、その場に伏せた。これは初めての経験だったが、日常の訓練の中で、人は本能的に行動できるのだろうと思う。

四本の指で目ぶたを圧さえ、親指で耳を寒ぐ格好で、暫くじっとしていると、爆弾はかなり遠くへ落下したようだった。

立ち上がって、対岸の土手を見ると、建設工業用の物置小屋が、跡形もなく消えていた。川向うの四ツ木方面からは黒煙が濛々と立ち昇るのが見えた。

B29は時々行き掛けの駄賃のように、盲爆することがあった。

私達見習工は工場の寮に入って、三度の食事は、工場の食堂でたべていた。その頃は工場への特配もなく、食事は日に日に悪くなるばかりでした。

朝、起床のベルと共にとび起きて、我先に食堂へ急行した。少しでも盛りのよい丼にありつくためだった。めしの中には大豆か、グリンピースが入っていたが、その頃、米はもうし訳のようにしか入っていなかった。

腹が減ってどうしようもなかった。街へ出ても、食堂はなく、パン屋はなく、ものを食べる店はもう何処にもなかった。

時々、工場の食堂のおばさんから甘藷をもらって、寮の中で焼いて食べ

るのが、せめてもの楽しみだった。だから仕事が終って、夜外出することはなかった。

その日、私達見習工は作業後、寮の中で眠りについていた。八時頃警戒警報はあったが、解除されたので床についたのです。眠りについてどれ程の時がたったのか、再び警報に夢は破られた。雨戸を閉めてあったので、私達は身支度をして、電燈の光が外部に漏れないように、黒い布を下げて、待機していた。時計がなかったので、時間はよく解らないが、かなり夜更けていたようだった。

外の方で誰か喚く声がします。雨戸を開けると、警防団の人が電気を消せ、敵はもう東京を爆撃しているぞ。私達は油断していたのだ。あちこちで人の声がして、ただならぬ騒ぎになっていた。

いつもとは様子が違っていた。鉄兜をつけ、土手に出てみると、遠くだが、かなりの火の手が上がっていた。空襲警報もないのに、敵は東京に侵入していたのである。

浅草、上野、深川方面は、火の海となって高熱の焔は、天を焦がしていた。それでも、空襲の経験を数多く知らない私は防空壕にも入らず土手の上に立って、こちらに迫る火の手をじっと見ているだけでした。

爆撃を完了したB29が頭上を超低空ですぎて行く、あまりに低いので、地上の火焔にのみこまれるのではないかと思いました。

ジュラルミンの大きな動体も翼も真っ赤に染って、頭上を飛び去るのを私は、只じっと見つめるばかりでした。始め、あちらこちらから、高射砲の音がしていましたが、いつの間にか聞こえなくなって、まったく敵のなすがままという感じでした。

でもその時、一機のB29が火焔につつまれて、上空を大きな円をえがきながら、飛んでいるのが、目に入りました。全身火だるまとなって、なお墜落することもなく、東京の上空を旋回している、敵ながら驚くばかり、強靭な機体でした。

その内に、すぐ近くに焼夷弾が落下しはじめたのです。つい先程まで、対岸の火事と思っていたのに、気がついた時、火の海は身近に迫っていたのです。

焼夷弾が、私の通学していた青年学校の近くにばらばらと落下しています。地上に落下した焼夷弾は花火のようだった。

その量の多いことは、今まで想像もつかないものでした。空中で炸裂した焼夷弾は七十二発の焼夷筒に別れて、地上に落下するのです。なぜあれ程大量の飛行機や焼夷弾や爆弾がアメリカにあるのだろうか、私は只々あきれるばかりでした。

少年の頃から、戦争は海の向うでやるものだった。戦争とは外国でやるもので、内地とは無縁なものだった。その内地に今、焼夷弾の雨が降っているのだ。

荒川の土手に運ばれた避難民の家財道具は益々多くなっていました。火がついたら、あっという間に焼きつくすだろう。

焼夷弾は益々近くに落下していた。だが当時の私はここなら大丈夫という安心感はあったのです。土手下の工場が焔に包まれても、土手向うの川に逃げたら助かるという気持ちが心の隅にあった事はたしかでした。十七才という若さのせいもあったのだと思います。

火の手が、どの辺りまできているのか、様子を見るため、私は土手をおりて燃えさかる火の街へはしった。いつも私達の利用する町の風呂屋が猛烈な勢いで燃えていた。その火を消すために、警防団の人達が手押ポンプ

で消火の真っ最中だった。

頭部をやられたのであろう。頭から顔面全体を白い包帯につつんで、目出し帽のように目だけ出した男が、昔侍大将の持った采配を振りかざして、絶叫している。

火は風を呼び、風は火を呼んで、旋風となって渦を巻いていた。私の存在など誰一人、目にもくれようとしない。無我夢中で手押ポンプをおしつづけるのだった。

自分の部署を守らなければ、ふと我に返って、私は一目散に工場に引返した。風呂屋から工場までは二百米位だった。

工場には誰もいませんでした。荒川の土手を利用してつくった防空壕の中に女性が数名いるだけだった。男達は何処へ行ったのだろう。土手にあがると家財道具の山ばかりで人間はいない。皆何処へ消えてしまったのだろう。

思案にくれているその時、かなりの速さで降下してくる二つの落下傘が目に入った。私は急いでその方向にはしった。かけつけると、火焔のため、真昼のように明るい中を、電柱をつたって、地上に降りてくるB29の飛行士の姿が、浮き彫りのように鮮やかにうかんで見えた。他の一名は民家の庭の木にひっかかり、うまく離脱出来ずにいる。とび口、スコップ、竹やりを持った大勢の警防団員が、その周辺を取囲んで睨み合いの状態だった。飛行兵は丸腰で、身構えるでもなく、地上に降りた彼は電柱に寄りかかり、身動きもしなかった。

興奮した大勢の日本人に包囲されていては無抵抗の姿勢で、じっとしている以外方法もなかったのだろうと思う。一方の日本人も、何やら喚めいてはいても、敵に向って突進して行く者はなかった。相手は二人でも凶器を隠し持っているかも知れない。やたらには近づけなかった。恥かしながら、当時の私の心にその不安はあったのである。

両者の睨み合いが続いている最中に、ジープのような小型トラックが到着すると、あっという間もなく連行していった。

その後の行動が私の記憶から、ぷっつりと消えているのです。土手の上に立って、巨大なB29を見上げていた記憶だけが、鮮明に焼きついているだけである。

夜が明けた。そして工場は焼けなかった。後に知った事だが、急に風向が変り、風呂屋の女湯は焼けたが、男湯は焼けなかった。手押ポンプで必死の消火作業をした人々の姿が今も私の目から消えることはない。

翌日から工場は送電ストップのため操業も出来なかった。朝早く私は自転車で灰燼となった街をはしった。街は異様な臭いに満ちていた。私はひたすらに自転車のペダルを踏んだ。行けども一面の焼野原だった。

水戸街道を右折して、言問橋を渡ると、隅田川の岸辺は水死体の山だった。干潮なのか水は少なかった。岸壁から二、三名の人が、長い柄のついたとび口で、死体を岸辺に引寄せているだけで、他に人の姿がなかった。

言問通りを入谷方面に進み、浅草寺の裏をすぎたあたりで、一人の婦人がとび口で瓦礫を掘り起こしている。見ると、とび口の先にひっかかって現れたのは、なんと蒸し焼きになった女性の死体だった。衣服からは湯気が妖気のように立ちのぼっていた。

私が朝早く自転車にのって浅草まで来たのには理由があったのです。日頃、何かにつけ私に優しく接してくれた久保さんという若い事務員の家が浅草三丁目にあったからだった。

給料日に彼女が病欠した時、社長に頼まれて給料袋を届けた事があった

ので、住所は知っていたのである。きてみると、もうその辺は一面の焼野原で、見当のつけようもなかった。きっと、何処かで生きているに違いない。そう一人できめて、私は又来た道を引き返したのだった。

しかし、それ以後彼女は工場に顔を見せることはなかった。姉のように優しかった彼女の死を知ったのは、それから大分後の事であった。

やがて、来るべき日がやってきた。昭和二十年八月十五日、茹だるような暑い日だった。工場の庭で天皇の放送をきいた。雑音だけで内容はよく解らなかった。暫くして、日本がアメリカに降伏した事を知った時、私の目からは自分でも解らない涙が、後からあとから流れるのをどうすることも出来ないで、茫然と立ちつくすのみだった。

空襲によって死んだ人々と、その遺族に国家は何の補償もしていない。戦争は二度としてはならない。

私達日本人は、世界平和のために益々、努力しなければならないと思います。